

国立病院機構仙台医療センター臨床研究部ウイルスセンターは、国内では数少ない臨床ウイルス学の研究施設として、発足以来輝かしい成果をあげている。また、研究のみならず、ウイルスに関係した業務や治験・受託研究、地域の感染症レファレンス機能、国際協力、教育といった役割も担っている。センター長の西村秀一先生に、センターの沿革・概要に加え、インフルエンザウイルスパンデミックに対するお考えや、最近取り組まれているインフルエンザウイルスの研究などについてお話を伺った。



西村秀一

国立病院機構仙台医療センター  
臨床研究部ウイルスセンター  
センター長

## 仙台医療センター臨床研究部ウイルスセンターの活動

臨床ウイルス学の草分け的存在として

——ウイルスセンターの沿革についてご紹介ください。

**西村** 国立病院機構仙台医療センターは、1937年に仙台陸軍病院臨時宮城野原分院として創設されました。1945年に厚生省(当時)に移管されて国立仙台病院となり、当時日本でウイルスを研究している施設がほとんどなかったなか、1958年に国立仙台病院ウイルスセンターが正式に発足しました。

1964年には小児急性気道感染症から日本で初めてRSウイルスの分離に成功しました。また、1968年には出血性膀胱炎の病原ウイルスとしてアデノウイルス11型を分離同定しています。さらに、1970年には妊婦の産道からサイトメガロウイルスを分離して産道感染によるサイトメガロウイルス垂直伝播を提唱するなど、初代ウイルスセンター長の沼崎義夫先生は、臨床ウイルス学で際立った業績をあげられました。1985年にはWHOより「ウイルス性呼吸器疾患に関するWHO協力センター」の認定を受け、その後JICA(国際協力事業団)の感染症プロジェクトによるアフリカ(ザンビア共和国)やアジア

各国の臨床ウイルス学教育にまい進しました。

日本の臨床ウイルス学の創生期から発達期において、当ウイルスセンターが果たした役割は非常に大きかったと思います。これまでに沼崎スクールからは、古くは福島県立医大の茂田士郎元学長や新潟大公衆衛生学の鈴木宏(現名誉教授)をはじめ、東北大微生物学の押谷仁、長崎大小児科学の森内浩幸、新潟大国際保健学の齋藤玲子の各教授、さらには国立感染研ウイルス一部の西條政幸



施設外観

2階がウイルスセンター、4階が宿泊施設。